



志度高だより 一飛翔の窓一

第113号
(H22.10.22)

「その一声が出ない」

毎朝校門であいさつをしているが、中にはどうしても「おはようございます」と言えない生徒がいる。口の中、または心の中では「おはようございます」と言っているのかもしれないが、こちらに聞こえてこないのはどうしたものか。彼らにしてみれば、「お前が勝手に声かけているんだろう。どうしてそれにいちいち応える必要がある」との意思表示か。

でもあいさつができないというのは、人間にとって致命的な欠点だと思う。耳にタコができるくらい聞かされてきたと思うが、人間は一人では生きていけない。だから他者との良好な人間関係の構築は、社会生活を営む上でどうしても欠くことのできない根っこの部分であると言える。初めて会った人に、いきなり「昨夜の阪神と巨人の試合、エキサイトしたね」なんて言うこともないだろうし、「暑いね。どうです冷たいビールでもやりますか」とも言わないだろう。最近では新人種も出てきたので、前置きもなくストレートで核心に迫るのがナウイやり方かもしれないが、それでも感情の相互交換という日本人特有の奥ゆかしい作法からしてみれば、やや唐突で無機質に映る。

日常生活において、せめてあいさつくらいはきちんとやりたい、と思うのだが。学校でもくどいくらいあいさつのことを言う。あいさつも練習だ。回数をこなせばできるようになる。その証拠に、ほとんどの生徒が大きな声であいさつを返してくれるようになった。最近では廊下の向こうからでも声が飛ぶ。元気が出る一瞬だ。あいさつされると、こちらもただ通り過ぎることができず、一声かけることになる。すると当然のことながら会話が進展して、ある程度お互い気持ちを許し合うことになる。あいさつは心の扉を開く魔法の言葉だと言われるが、それも頷ける。



年金犬の散歩をしていて多くの人と出会う。そしてあいさつを交わし言葉を交わす。日頃手間のかかる年金犬ではあるが、彼のお蔭で多くの人と知り合うことになったのは天の配剤か。ところがごく稀にこちらがあいさつしても絶対に返してこない人がいる。もう何年もその状態だ。こっちも相手も同じ時間帯に散歩。だから毎日すれ違う。こちらは判で押したように「おはようございます」と言うのだが、相手はまったく返事をしない。ときには「こいつ」と思うときもある。最近では、こういう人もいるんだ、と諦めているのだが……。

先ほど、あいさつは練習すれば簡単にできる、と言ったが、ごく一部の人のにとってはそれは真実ではない。最近では医療も進み、正式な診断名が付けられるようになった。社会性がないとか、コミュニケーションが苦手とか、特徴も明らかにされている。むかし物忘れの激しい生徒がいて、「お前は何で俺の言うことが分からんのか。俺をなめとんか」と恫喝的な言葉を吐き、ときには手も振り上げた。それでも直らなかった。「あいつはダメだ」無知だった私はそんな結論を下した。

ところが、今はなるほどな、と納得する部分がある。そういえば彼も彼女もそうだったかもしれないな、と。だから、あいさつをしないのではなく、あいさつができないのだ、と解釈できるようになった。「おはようございます」と喉元まで出かかっているのだろうけど、その一言が口から飛び出さない。本人にとっては大変な苦痛に違いない。「そんなこと分かっているんだよ」彼らの心の叫びだ。

人生において、大切な一言が言えなかったために、死ぬまで後悔することがある。逆も然りで、余計な一言を言ったがために一生悔やむ。大切な一言はバーゲンセールみたいに安売りすべきものではない。かと言って、出し惜しみをしていると、遣わないまま黴びて、饅えて、腐る。言葉は遣うときに遣ってこそ威力を発揮する。私にも胸にずっとしまっている一言がある。いつか、と思いつつながら勇気が出ない。今もって忸怩たる気持ちを拭えない。

こんなことは何も言葉だけではない。人と会うこともそうだ。会うべきときに会わないと後悔する。私は父の死に目にあえなかった。前夜、ミカンをほしがったのに、医者に止められているからと、非情にも「ダメだ」と言った私。喉の渇きで粘ついた父の声が今も残る。

人間とは、ときとして弱いくせして強がる生き物だ。見栄とか世間体とか、そんなものを気にして。感謝しなければいけない人に「ありがとう」と言えない。好ましく思う人に「大切にしたい」と言えない。母親に「生んでくれて、ありがとう」と言えない。そんなことばかりだ。

今は「おはようございます」と大きな声で言えなくてもいい。でも、どうしても必要なときのために練習しておこう「おはようございます」「ありがとう」、と。その先に「あなたに会いたい」「あなたが好き」「会えてよかった」という言葉があるのだから。

